

綴葉

て
い
よ
う

'22 11

No.412

あなたが創る生協の書評誌



話題の本棚

山口尚著『人間の自由と物語の哲学 私たちは何者か』

小野紀明著『政治思想史と理論のあいだ「他者」をめぐる対話』

特集／絵画

新刊コーナー／新書コーナー／最近読んだ本／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2 階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

 univ. 京大生協
CO-OP 綴葉編集委員会

哲学と文学の二刀流

人間の自由と物語の

哲学

私たちは何者か

山口尚著
トランスビュー



人間は自由な主体でありえるのか。自由であるのなら、それはいかにしてか——この問題に、哲学と文学の二刀流で取り組むのが、本書『人間の自由と物語の哲学』である。

著者の山口尚に馴染みのある方は多いかもしれない。山口は全学共通科目「論理学Ⅰ・Ⅱ」を教えている（評者も一回生の頃に世話になった）。あるいは「ジョジョ論文」で知っている方もいるだろう。山口の二〇二二年の論文「宿命論と人生の意味」は、漫画『ジョジョの奇妙な冒険』を手がかりに人生の意味を考察するエキサイティングな一本だ。当論文はKURENAIの二〇一九年のDL件数ランキングにて堂々の一位を獲得している（同年DL数は五万回超）。

山口の議論の手つきを理解するため、当論文の内容を簡単に見ておこう。人生じることばすべて必然的に生じる——という宿命論を前提とすれば、人生の意味は脅かされる。つまり、予めすべてが決定されているならば、人生は無意味となる。しかし、このギリギリの状況下でなお、人生に意味はあると希望を抱く視点はありえ、まさにこの視点に私たちを誘うのが『ジョジョの奇妙な冒険』である。

極力抽象化して言えば、ある概念が危機に瀕する限界まで接近した後、それでもやはりその概念を擁護する——このアイロニカルな

語り方が山口の特徴的な手つきである。これは本書でも健在だ。

第一部では、自由や主体の概念が哲学的・原理的に探究される。まず山口は、これらの概念が「人間は物質から成る」という考えに脅かされる事態を見据える。これはすなわち、人間が、または人間を動かす脳が原子の集まりであるならば、一切は無主體的な出来事であって、自由な主体が行為を行うことなどあり得ないという事態だ。このように人間の不自由さを主張する立場に対して、山口は切り返す。そう言うあなたは主張する、という行爲をしている、すなわち自らを自由な行為主体だと示しているではないか、と。

第二部では、第一部で示唆された「自由や主体といった概念はいかにして可能なのか、主体性の原理とは何か」という問題が解釈的・歴史的に探究される。山口は、坪内逍遙から夏目漱石の『門』に至る明治文学史に分け入っていく、最終的には『門』の解釈を通してこう結論づける。自由な主体はアイロニカルな主体である、と。この主体は、「なんでもあり」の自暴自棄に陥るのではなく、ニヤニヤと現実を唾うのでもない。そうではなくて、いかなる原理を避けてつとも、実験的かつ慎重に解決を探すのが、自由な主体である。このあり方がこそが、本書で提示される意味でのアイロニーとなる。

アイロニカルな主体というあり方を彫琢する以上の過程で、山口はさまざまな立場や作品を参照する。山口自身、こうした議論の進め方を「行ったり来たり」や「往還」と形容する。そのため（論述は明確であるが）本書は長い道りとなるだろう。しかし、それは同時に、踏破する価値のある道りである。

（投稿・伊藤迅亮）

（四四八頁 税込三〇八〇円 8月刊）

「でも他者の問題は今でも重要だと思っのです」

政治思想史と理論のあいだ

「他者」をめぐる対話

小野紀明著

岩波現代文庫



ロールズに、現代リベラリズムに、「他者」は存在しているのか——奮勇を承知で、たとえば著者の問いをこのようにパラフレーズしてみれば、原著初版から一七年経っているという事実は瑣末な、むしろその先駆性に驚嘆すべき事実に相違ない。本書が掲げる「思想史と規範理論の架橋」は今なお大きな課題であり、それに対して思想史の立場から「多様な政治的規範理論の依拠している歴史的文脈を解明すること」を旨とする本書は、著者が自ら認める通り、一風変わった概説書となっている。同じ分野でも、キムリッカ『現代政治理論』（日本経済評論社）ではロールズ以降の諸潮流を広範に検討する構成、川崎・杉田編『現代政治理論』（有斐閣）ではテーマ別の構成を採用し、他方、福田『政治学史』（東京大学出版会）や藤原『西洋政治理論史』（早稲田大学出版会）、宇野『西洋政治思想史』（有斐閣）などではいずれも時代順を主とした構成を採用していることに鑑みると、立脚している思想史的潮流を検討し理論を評価するという本書の試みは未だその意義を失っていない。



著者はホッブズから始める。個人の合理的選択が国家を設立させるとしたその議論にはアポリアがある……契約によってエゴイスト

たちの間に共同性を創出しようとしても、そもそも契約を締結するためには既に一定程度の共同性が存在していなければならないのである。ここに、その源流たるホッブズに見出された問い、すなわち「他者」との共同性をいかに基礎付けるか」が規範理論の根本問題として提出される。この観点から、本書は4つの潮流（市民的共和主義的、コミュニタリアンの、ポストモダン的）を論じる。詳細を紹介するには紙幅も技量も不足しているため、ここでは一点だけ記しておきたい。本書で「他者」の問題が本格的に論じられ始めるのは、評者の見たところアレントを検討する第7章である。以降、コミュニタリアンの、ポストモダンの規範理論と、ロールズに連なる合理的選択論的な潮流に相対する思想が論じられるが、そこでしばしば重要となるのが「言語」であるのに注目したい。いわゆる言語論的転回とは二度にわたり解説され、フーコーの権力論も「言語の暴力」と題して紹介される。政治思想の概説書として、言語が重点的に論じられるのは類書にない特徴であるように思われる。



著者はあとがきで、「結果として成功したとは言いがたい」と述懐するが、幅広い分野を渉猟し、本文から注のそれぞれまで（一番長いハイエク批判の注は4頁にわたる）多くの論点を提示している点に鑑みると、やはり本書が再び世に出ることを言祝がずにはいられない。当初は再版に難色を示した著者の琴線に触れた編集の北城氏の言葉は、とりもなおさず、本書が再読されるべき理由でもある……「でも他者の問題は今でも重要だと思っのです」。

（侯爵）

（二四六頁 税込二六二八円 6月刊）

〈特集〉 絵画

画家は、絵画によって物語を綴る。あるいは命を削り、血潮を流し、人生を表わす。

光も闇も、色彩も、命をかけた諍いもその中で輝く生命も、絵画は全てを内包する。

画家は描き切った。その者が生きた痕跡を、世界を。

ではその絵画を見る者は？

深遠をのぞく時、深遠もまたこちらをのぞいているのだ。

世界の向こう側を見に行こう。

(黄丹)

光照らす所に影あり

テーブルに腰かけた男たち。その一人を指さすキリスト。彼と共に射し込む一条の光。

一六世紀の油絵《聖マタイの召命》である。この画を見た者は直ちに圧倒されるだろう。明暗の強烈なコントラストが生む緊迫感に。光と影によって絵画は何を語るのか。

光と闇——対立と調和——

『闇の美術史』（岩

波書店）は古代壁画

から戦後日本の絵画

に至るまでの美術に

おける光と光の相克を辿った一冊である。光

と闇が象徴するもの、それは時代や作者によ

って様々である。例えばキリスト教圏におい

て光は信仰を、闇は不信仰を表した。宗教画

に描かれた陰影は、神たる光と無知蒙昧たる

人間の闇を対立させるものだった。一九世紀

光と闇の対立をひと際象徴的に描いたのはゴ

ヤだった。ナポレオン軍による民衆虐殺を描

いた《一八〇八年五月三日》。中央に置かれ

た灯りが照らすのは犠牲者となる市民。とり

わけ白く輝く男の手にはキリストのような聖

痕が。一方、彼らを銃殺する兵士たちには陰

影がかかる。ゴヤが描きたかったのは理性の光



に対置される「人間の救いようのない心の闇」であらう。

陰影が生むのは対立だけではない。ベラスケスやフェルメールが描く室内風俗画では影の部分にも淡く光が届き、その絶妙な加減によって「現実が現実のままで結晶」したような作品に仕上がっている。どうやら、彼らの描く素朴な一コマに我々が心動かされる理由は卓越した写実的明暗表現にあるらしい。

水源、カラヴァッジョ

ところで、絵画における光と影を知る上で

外せない画家がいる——カラヴァッジョだ。

『もっと知りたいカラヴァッジョ』（東京美

術）は豊富なカラー

図版に詳細な解説が

付されたカラヴァッ

ジョ入門書である。

彼の革新性はいくつか挙げられるが、その一

つに彼以前の宗教画にはあまり見られないド

ラマ性と迫真性を明暗によって表現したことが

ある。イタリアで活躍した彼は、画家とな

った当初は写実の範囲でのみ陰影をつけてい

た。しかし、冒頭に挙げた《聖マタイの召

命》以降の作品では、写実の域を超えた鋭い



明暗が作品を支配していく。教会の窓から差し込む自然光の角度を計算して、光の線を描き込んだ《聖パウロの改宗》は、ダイナミックな構図からは思いもよらぬ緻密な陰影に演出されている。

彼の陰影は単なる技法としてあるのではない。カラヴァッジョは注文記録よりも犯罪記録に名を残すほどの放蕩者であった。終いには殺人罪で死刑を宣告されてしまう。逃亡を強いられる中で描いた画では闇が濃さを増し、筆触は荒くなった。人生の紆余曲折が凡人では到達しえない極みに彼を追いやった。成功という光、罪という闇を纏う人生。決して解け合うことのない両者。画の中の光と影が伝えるのは画家の人生そのものなのかもしれない。

光と影の魔法

「光と影は人生そのものであり、自然そのものである。人生の美しさ、自然の美しさ、神秘さ、あたたかさ、優しさを、一瞬の止まった時間の中で、一枚の影絵の中で、静かに深く描き出してゆければと思う」。影絵作家、藤代誠治の言葉である。一九二四年生まれの藤代は、幻想的な世界観を特徴とする作家だ。ゆえに、藤代の創る影にあるのはカラヴァッジョのような「暗さ」ではない。そこに宿るのは、生という光を引き立てる影である。戦争という

激動を生き抜いたからこそ、彼の作品には生命の美しさを讀めるものが多くある。『藤城清治 光と影の世界』（平凡社）に収録された影絵壁画、《生命讃歌》。海、山、動物、小人、太陽……。全てが調和しハーモニーを奏でているかのように描きこまれた楽器たち。グラ



無数の青に溶ける

光と影。絵画の世界を永続的なドラマの中に閉じ込めるのに非常に重要な要素であろう。ここからは絵画を構成する別の要素「色彩」、中でも「青」に焦点を当てたい。空、水、宇宙、生命の始原に繋がるようなこの色は、数ある色の中でも特に深い物語を感じさせる。特に印象的な「青」を描いた三人の画家に迫っていく。

物語に吸い込まれる青

まずは、「フェルメール・ブルー」と、彼がよく用いたウルトラマリンブルーにその名が付されたヨハネス・フェルメール。フェルメールは「光の魔術師」の異名を持ち、光と影の織りなす世界は永遠に続く映画の一シーンを切り取ったかのよう。『フェルメールの

デーションを為す絶妙な陰影と鮮やかな色彩が織りなす生命のほとばしり。光と影は対立や調和を越えた壮大な世界を表すに至った。時には目に見える限りの精確に、時には己の内面を映し、時には目に見えぬ美しい世界を夢想しながら、画家は光と影を描いてきた。だが、その光と影を描くのに欠くことのできないものがある——色彩である。（はらん）



世界』（パイ インターナショナル）を開けば、彼の紡ぐ静謐な物語に、拡大図を通し深く入り込むことができる。フェルメールは窓辺に一人佇む女性をよく描いた。当時外の世界に出ることの少なかった女性にとって、窓は室内と世界をつなぐ接点であり、窓の外は街、さらには海を隔てた遠い世界を想起させるものであったのかもしれない。柔らかな光の右手紙を読む「青衣の女」。その手紙は彼女の頭上の地図が記す海の彼方から届いたのではないだろうか。彼女の身は、そしてきっと心も、優しく純粋

な青に包まれている。

感情の渦に引き込まれる青

永遠を感じた物語を描き続けたフェルメール。彼に影響を受けた人物としてフィンセント・ファン・ゴッホがいる。例えばフェルメールは青と黄の補色を愛したが、これはゴッホにも引き継がれている。『ゴッホ作品集』（東京美術）の表紙を飾る「夜のカフェテラ



ス」はその典型。ゴッホは確固とした目的を持って制作をした理論的な画家である。同時に筆触や色使いは彼の全ての感情を露わにしているよう。ゴッホはなぜ絵を描いたのか、本書を開き、彼の歩いた道筋を迎える旅に出よう。オランダ時代は暗い色調で苦難を懸命に生きる人々を描いたゴッホ。パリでの様々な出会いと発見に満ちた生活の中、彼のパレットに明るく鮮やかな色彩が表われ始めた。桃色と水色の跳ねるような短い線を重ね描いた空に、明るい希望が滲む。画家たちの共同生活の場をつくるという夢に乗り出したアルル時代。「夜のカフェテラス」が描かれた。妹ヴィルに宛て「これはただ美しい青と紫と緑だけによる、黒なしの夜の絵だ」と記している。明るい青のグラデーションと黄色く輝く

星に、当時のゴッホの夢に溢れた日々を思う。耳切事件の療養のため移ったサン・レミ。精神病の発作に苦しみつつも、筆触と色彩の自由を手にし「トレッドマークといえる「うねり」を生み出した。「星月夜」、線がひしめきうねる夜空に、星月が波紋のように光を広げる。群青や緑や黄色混じりの混沌とした青を、水流渦巻くような空をゴッホはどんな思いで描いたのだろうか。この絵を見ていると、感情の渦に飲み込まれそうになる。

ここではないどこかへ連れて行く青

ゴッホは浮世絵を愛したが、ジェームズ・マックニール・ホイットスラーも同様だ。彼は和装の女性を多く描き『ホイットスラー』（西村書店）の表紙の女性も団扇を持っている。人物画も魅力的な

彼だが、ここでは風景画を見ていきたい。ホイットスラーは水辺を愛した



あの戦争を経由して

陰影と色彩、絵画の中で描かれる青さは時に悲哀と鎮静を与え、観る者を静かに慰める。では青さと聞いて、浮かんでくる日本画とは

画家だった。その風景画は多くが青に染められている。緑が強かったり、茶色が混じっていたり、その青もいろいろだが、どれも霞がかかった、しかし透明な空気に満ちている印象だ。「フクターン・青と金色」は、黄昏時のテムズ川を描いた作品。湾曲した橋と背後に上がる花火、遠くの工場群、そして舳を漕ぐ一人の男のシルエットで構成される。確かに現実には存在する場所なのに、ファンタジーのような。静かで、金色にきらめく花火の音もないような。舳が行き、工場の光が揺らめく中でも、世界は凪いでいるような。じっと見つめていると、ここではないどこか遠くに、自らの心音しかきこえない奥深く澄み切った場所に連れて行ってくれる。

一重に青といっても、その色は、そこに秘められた思いは無限である。登場人物として画家の息吹はその青を以て永遠に留まり続ける。さて、次はゴッホとホイットスラーが愛した日本画を見に行こう。

（黄丹）

何だろうか。私は東山魁夷の「白馬の森」（『東山魁夷 青の風景』）が浮かんでくる。青い森、白い馬。長く風景画を描いてきた東

山魁夷は、風景の中に溶け込む白い馬を描いた。緑葉の森が映し出される湖面の中で、駆



け抜ける白馬は、人間がいなくなった後の静けさを感じさせてくれる。

そんな絵を描いた東山魁夷は、順風満帆な人生を歩んできたわけではなかった。若くして評価されたが、太平洋戦争の中で画業も実家も傾いていった。戦時中に父と母を喪い、戦後すぐに弟を喪った。戦後国民的画家と称される程有名になっていく東山魁夷の絵の中に、いつも寂しさと静けさを感じるののは私だけだろうか。「月宵」、本書の一番最初の作品は、疎開先で描いた風景だ。「長い間私は自分の最も身近な処にある題材に気付かなかったのです」。その画の中に、多くの喪失と、そして喪失を通してしか見えてこない風景が描かれている。

時代に飲まれて

戦争は人の人生を歪めてしまう。そして作品そのものの運命も変えてしまう。戦争と絵画について考えるなら『無辜の絵画』（広島現代美術館編）を開くといい。亡くなった命と



失われた絵画に思いを馳せて、戦争の残酷さとあの時代の空気を感じられるはずだ。

「加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカサルニ至ル」。玉音放送において原爆に触れた部分である。無辜の殺生、無辜とはまたまそこに居合わせた罪のなかった者たちをさす。本書で最初に取り上げられる豊光は、広島出身の画家である。悪化する戦況の中でも絵を描き続け、召集され満州で亡くなった。

その絵は重く、暗く、不気味である。収録されている「眼のある風景」みていると、鑑賞者を不安にさせるような緊張が伝わってくる。日本のシュルレアリスムを代表するこの作品は豊光の一つの到達点を示す。

決して抵抗の画家ではなかった。出征が決まった時「俺は家族のためにがんばっているよ」と言ったとされている。しかし統制が強まる社会においても多様な解釈を含む絵を描き続けた豊光。その作品の中にあの時代の、誰もが引き受けた重圧が宿っている。

戦争も世間からも離れて

最後に紹介したいのは高島野十郎である。

◎高島野十郎 光と闇、魂の軌跡」。魁夷と豊

光と同じように彼も戦前に生まれ戦争を経験



した。東京大空襲の中で家を喪い、生前は画壇と付き合うことがなくほとんど無名の作家であった。しかし近年その評価が高まってきた。

稀有な画家だった。東京帝国大学を首席で卒業したのに銀時計を受け取らずに画家になった。人と関わらず晩年は水道も電気もない小屋で暮らしていた。何もない場所なのに、彼にとっては天国だった。

闇を書くのが好きな画家だった。よく月を描き、蝋燭を描いた。「月ではなく、闇を描きたかった。闇を描くために月を描いた。月は闇を覗くための穴です。」無垢に純粋に、世界を描写していた。

月うかぶ空のまことのむなしくもわが身の程の思ひ知らるる

絵の中に魂が宿る。物や人や風景を描くことは、その向こう側を描くことである。高島野十郎の作品を見ていると、時代や世間から離れたからこそ見える光景を教えてくれる。

画集をもっとじっくり絵と向き合うことが出来る。本で物足りないなら是非足を運んで美術館に行ってみよう。絵画が描く世界は、あなたの人生に光を灯し彩を与えてくれるかもしれない。

(きせいの)

新刊コーナー

北欧こじらせ日記 移住決定編

週末北欧部 chika 著
世界文化社



著者のチカさんは、二〇歳の時に初めてフィンランドを訪れ、街中に豊かな自然がある土地柄と暖かくちょうど良い距離感で生きる人々に一目惚れ。会社員をしつつ二二年間フィンランドに通い一途に愛を育み、今年の春、ついに寿司職人としてフィンランドに移住。「好き」に導かれ夢を叶えられたのだ。本書ではそんなチカさんの日々がゆるく可愛らしいイラストや写真と共に綴られている。一章はチカさんとフィンランドのペンパルのお話。お互いの国のお菓子を送りあってみよう！の回など微笑ましいやり取りにほっこり。二章ではフィンランドでのご友人とのエピソードが。ラップランドのサンタクロース村で念願のサンタさんに会うチカさんと、車の中で睡眠を取るご友人。「一緒にしなきゃ」ではなく、旅の中でも「それぞれで楽しもう」という心地よい距離感、自分らしく生き

るあり方に、いいなあと思う。

そしてフィンランドでお寿司職人になるための準備のお話。会社員として働く中、寿司学校に通い、寿司屋で働き、英語の授業を受ける。全力で夢に邁進するチカさんと、学校の仲間、先生、寿司屋の大將、会社の同僚、そしてご友人たちの心の繋がりに、どの国でも人って暖かいんだなあと感じる。

「失敗してもいい。夢のために生きる時間を私も持ちたい。」夢に立ち向かっている人、他人との関係にちょっと疲れてしまった人、ぜひおすすしたい一冊である。（黄丹）

（二二五頁 税込二五四〇円 8月刊）

羊皮紙の世界

薄皮が秘める分厚い歴史と物語

八木健治著
岩波書店



二〇一六年、イギリスである決定が下された——「法律は紙に印刷して保管すること」え、当たり前じゃあないの？否、それまでイギリスで使われていたのは「羊皮紙」だったのだ。なぜ何世紀もの間英国議會は羊皮紙にこだわったのか。いや待て、そも

そも羊皮紙って何だ？羊皮紙に関する素朴な疑問から、非西洋圏の羊皮紙文化に至るまで羊皮紙のことなら何でもござれな一冊。

著者の八木は自宅の風呂場で羊皮紙を手作りするほどの熱意ある羊皮紙研究者。そんな彼が、稀少な羊皮紙職人に密着しながら製造工程を丁寧に解説してくれる。羊皮紙づくりは食用部以外を有効活用しようとした結果である。昔ながらの製法では、化学薬品などは使わず、あらゆる材料が自然の恵みによって賄われる。羊皮紙づくりから見えるのは、先人たちが練り上げてきた知恵と工夫であり、自然との共存である。

このようにして造られた羊皮紙が、人類の歴史を支えていると言っても過言ではない。紙では到底残りのない、遠い時代の記録に我々が触れられるのは羊皮紙のおかげなのだ。羊皮紙を使って書かれる写本には実に様々な工夫が施される。そこに施された装飾、羊皮紙の表面加工の違い、さらに羊皮紙に関する宗教的規則など、羊皮紙を通してしか知れない文化がたった一枚の紙に込められているのだ。

さあ、羊皮紙に興味を持ったあなた、この本片手に羊皮紙造りに挑戦しよう。牛皮製の犬ガムでできてしまうから。（はらん）

（一二三頁 税込三二九〇円 8月刊）

読者に憐れみをヴォネガットが教える「書くことについて」

カート・ヴォネガット・スザンヌ・マッコネル著
金原瑞人・石田文子訳 フィルムアート社



「長編小説は死んだ。いまとき小説など誰も読まない。アメリカはみずからの想像力を失った。」

カート・ヴォネガットが亡くなったのは二〇〇七年のこと。亡くなって一〇年以上の歳月が経つのに、未だ多くのファンの心に根付き、その名前を聞くことは多い。本書はそんなヴォネガットの文芸創作講座を、教え子のスザンヌ・マッコネルが書籍化したものである。第二次世界大戦の経験、ドイツ軍捕虜となり英米のドレスデン爆撃を間近に体験したこと。その経験が小説に繋がるまで長い長い年月が必要だったこと。小説では見えてこなかったヴォネガットの創作秘話が語られる。読んでいて思い浮かぶのは、マッコネルの優しい視線である。教え子であり生涯の友人であった彼女は、きつと懐かしさと温かみをもってこの本を制作したのだろう。編集の中に彼女がヴォネガットにとって気の置けない友人であったということが見えてくる。

そして冒頭のセリフ。ある日ヴォネガットが授業で語った言葉だ。学生は困惑し、小説を書くことは無駄なのかと質問した。ヴォネガットは背筋を伸ばし煙草を消しながら答えた。「小説家として生計を立てることはないだろう。しかし……世界を見る必要があるのと同じ理由で書かねばならない」。ヴォネガットにとって、芸術に関わることは「魂が成長する」ことだった。例え読者がいなくても、創作をしなくてはならない。自らの魂の為に。芸術では食えない、それでも書こう。その先になりたい私がいるのだから。（きもの）
（六一六頁 税込三五二〇円 6月刊）

レーモン・クノー 〈与太郎的観智〉

塩塚秀一郎著
白水社



『地下鉄のザジ』という作品を知っているだろうか？ 女の子ザジが地下鉄ストライキ中のパリの街をあちこち。それにみんなが巻き込まれて右往左往する話だ。なかなかシニールな映画にもなっている。原作者レーモン・クノーは実験的作家集団ウリ

ポのメンバーで、他にも同じ内容の文章を九十九通りに書き分ける『文体練習』という作品の作者でもある。そのクノーについての評伝が本書である。

ところで副タイトルの与太郎とは何なのか。落語の登場人物である。のほほんとその日その日を暮らしていて、たとえば仕入れ値でものを売ってしまつて利益を出すのを忘れるなど一般社会からすれば「愚か者」と笑われるような人物だ。クノーの作品にはそんな、客観的に見れば愚かに見える人々がよく出てくる。だが、その生き方は「愚か」なのか？ と著者は問いかけを投げかけてくる。

「愚か」だと断じるためには「賢い」という評価基準が必要だ。たとえば利益を上げることが賢く、コスパ良くこの世を渡るのが賢く、マウントを取って上に立つのが賢い。今の世の中だと、さしずめそんなところだろうか。

与太郎はそんな「賢さ・愚かさ」の基準を解体してしまつ。一つの出来事が九十九通りに書けるように、一つの人生を測る価値基準は一つではない。クノーの作品からはそんなことが読み取れるのかもしれない。

「愚か者」ゆえに笑いを伴って現状を風刺できる。そこに面白さがあるのだ。（ねこ）

（二二〇頁 税込三〇八〇円 5月刊）

未来をつくる言葉

わかりあえなさをつなぐために

ドミニク・チェン著

新潮社

ジャケ買い。まさ

か、CDやお菓子箱

以外でその衝動に駆

られるとは。そして、

思いがけぬ示唆をもたらしてくれるとは……。

そんな驚きに満ち溢れている本書は二〇二〇

年に単行本として発売され、今年の九月に文

庫化された。著者のドミニク・チェン氏は日

仏英のトリリンガルで、新進気鋭の情報学者

かつ芸術家だ。テクノロジーと人間、自然存

在の関係性を研究している。

娘の誕生の瞬間に自らの死が予祝された

と感じた著者が、この感覚に名前をつけようと

自身の「はじまり」と「おわり」のパターン、

つまり生の軌跡を記すために本書は誕生した。

その感覚が生じた理由やその意味を、言語学

や哲学、情報学など多様な観点から探る。

コロナ禍をはじめとして世界の分断が顕著

化している。しかし、娘の誕生を契機に自分

の死後も娘と共に在る感覚を得た著者は諦め

ない。「コミュニケーション」とは、(中略)わ

かりあえなさを互いに受け止め、それでもな



お共に在ることを受け容れるための技法」と

し、他者と共に在る感覚を得ることで分断を

乗り越える未来を描く。人々が分裂した現状

に甘んじず、関係をつなぐ道を模索している

人であれば、著者の言葉に希望の萌芽を感じ

ずにはいられないだろう。少なくとも私はそ

う感じ、その未来に寄与したいと思った。

言葉の網に掛からず、手元からこぼれ落ち

た内容が私の足元でひしめいている。本書を

読み、あなたの手でそれらをぜひ掘り上げて

ほしい。そこから新たなコミュニケーション

が生まれるはずだ。

(二四六頁 税込六〇五円 9月刊)

(前髪)

魅惑の生体物質をめぐる光と影

ホルモン全史

ランディ・ハッター・エプスタイン著

坪井貴司訳 化学同人



ホルモン——それは

は全身の様々な臓器

や細胞で製造・分泌

され、私たちの身体

のはたらきを調整する機能を持った化学物質

の総称である。

本書は内分泌学の歴史を追いつながら、ホル

モンに魅了され、時には翻弄される科学者や

医師、患者、そして一般大衆の姿を描いた科

学読本だ。ホルモンという存在がどこか神秘

的なのは、このごく少量の化学物質の中に人

生を劇的に変える可能性が秘められているか

らだろう。身長を伸ばすことや男らしさを維

持すること。月経と妊娠をコントロールする

こと。自分のありたい性別でいること。他人

に優しい気持ちになったり、食欲を抑えたり

すること。私たちはホルモンを制御すること

で、自分の身体(心も)を自由自在に制御

できるかもしれないのだ。ホルモンの歴史の

「光」は数多くの難病や不快な症状がホルモ

ン注射やホルモン剤によって治療可能になっ

たことだが、ホルモンの歴史の「影」は、

人々の欲望と商業主義が杜撰な治療や薬書を

引き起こしたことである。

自分が本書を読んで思い浮かべたのは、「し

あわせホルモン」として巷で注目されるセロ

トニンだ(正確には神経伝達物質)。「甘い

や「怠け心」と見なされることも多かったう

つ病は、ここ二〇年ほどで急速に脳の病気、

ホルモンの病気として認められた。その一方

セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)の

販売開始と同時に、「軽症うつ」と診断され

る患者が爆発的に増加したという指摘もある。

ホルモンの歴史は今も展開中だ。(りつち)

(二四九頁 税込二八六〇円 8月刊)

この夜を越えて

イルムガルト・コイン著

田丸理沙訳 左右社

想像を掻き立てる
訳題に、おもわず震
える。そして表紙に
は麗しき乙女。夜の



只中にいるかの如く、その表情は読めない。

早くからこの作家を紹介していた訳者により、コインの代表作が遂に刊行された。主人公ザナは一九歳。ドイツはフランクフルトにて、ナチスの支配が強まる大戦前夜を生き延びた。總統のパレード、連行される隣人、そして亡命。若い女性の視点から歴史的状況が描かれており、一九三七年の刊行当初より反響を呼んだというのも頷ける。また登場人物の語りが、どれも迫真に迫っている。中でもイデオロギーに依らず発せられるザナのモノローグには、広く深い共感を呼び起こすものがある。「わたしの頭がぐちゃぐちゃで、こわくて、でも何がこわいのかわからない」。実感に重きが置かれた作品であることは、ときに読者を困惑させるだろう。ザナはファシズム体制下で喘ぐ自分たちをただ見つめている。無数の皮肉を心中で展開しつつも、殆

ど実力行使に出ない。しかしその態度こそ、国民の一種型だったはずである。閉塞した社会に対しコインが持ち出すのは、安易な理想郷や似非リアリズムではない。信じられるものが極限まで切り詰められた目の前の生活に没入し切ることで、彼女はナチズムの空虚さに対抗したのである。この戦略には、敵も味方も欺きながら時代を生き延びた、コイン自身の間個性が関係しているのかもしれない。描かれた全てが、醜悪な現代の写し絵かと誤認してしまう。読後に残るその感覚は、しかし錯覚だとも言い切れまい。(とよ)

(二二四頁 税込二七五〇円 8月刊)

ユートピア文学論

徹夜の塊2

増補改訂版

沼野充義著 作品社

ロシア・ポーランド文学を専門とする碩学、沼野充義。彼のライフワークとも



言うべき畢生の三部作「徹夜の塊」シリーズが、本書をもってついに完結した。『亡命文学論』『ユートピア文学論』『世界文学論』から成るこの三部作を通じて、著者は、ロシ

ア・ポーランド文学を中心に、古今東西の文学作品を縦横無尽に論じてきた。その知識量にはただただ圧倒されるばかり。一体どれほど「徹夜」すれば、これまでの大著を、しかも三冊も書けるのだろうかと思え込んでしまう。

ともあれ、「徹夜の塊」シリーズの第二巻にあたる本書には、著者が「ユートピア的想像力」をめぐる書き溜めたさまざまな文章が収録されている。ユートピア的想像力とは「いま・ここに生きながら、いま・ここにないものを思い描き、それを作り出そうとしてしまふ」想像力のこと。一九・二〇世紀のロシア・ポーランドには、この想像力を豊かに有した作家が多い。ドストエフスキー、ボグダーノフ、ツィオルコフスキー、ザミャチン、あるいはコワコフスキー。彼らはその想像力を駆使して、彼らなりのユートピア、あるいはアンチ・ユートピアを思い描いてきた。著者は、ロシア革命やスターリニズムといった当時の時代背景を視野に入れつつ、その想像力が発揮される現場に分け入っていく。本書で印象的だったのは、ポーランドの詩人、シンボルスカの詩だった。こんな詩である。「平凡な奇跡は／平凡な奇跡がたくさん起きること(……)ただ見回せばそこにある奇跡は／世界がどこにもあること。(ばや)」

(四九〇頁 税込五二八〇円 6月刊)

憲法の土壌を培養する

横川恒正・木庭頭・樋口陽一編著
日本評論社

「某宗教団体と政治の関係が問題になっているけれど、信教の自由や請願権は、



日本国憲法で認められているし、どう考えれば良いか、わからない」という貴方、「今の政治は何かおかしいが、どう考えて良いかわからない」という貴方に薦めの一冊である。

本書は、木庭ローマ法学、樋口憲法学についての好個の入門書であるとともに、憲法、政治を多角的に、そして根源的に捉え直し、実際の政治に対して批判的視座を持つことを可能にする最良の書である。

本書の鼎談では、まず、「政治」とは何か、が議論され、「一個の全体社会の頂点の意思決定を、自由で独立の主体相互間の特別な質を持った厳密な議論によって行い、かつ一義的で明確なその決定を迂回することなく自発的に遂行する」(一二頁)という定義が合意される。この立場から利益集団が有形無形の力により議論、政治を歪めることが否定される。こうした事態に対する防壁として近代に

構想されたものが国家であり、ここに政治としての実質を充填する役割を担うのが憲法なのである。本書におけるこうした理解に立つとき、冒頭で述べた疑問は、自ずと永解するだろう。利益集団が自由な個人による議論を圧殺し、先述の定義でいうところの「政治」がもはや存在しないことが問題なのである。本書は毛利透ら気鋭の研究者の論考も収録し、憲法、政治についての多角的な理解に資している。また、足立論文への木庭の付度の無い応答は、真のクリティックがいかなるものか教えてくれるだろう。(投稿・行人)

(三三〇頁 税込二七五〇円 5月刊)

グローバル開発史
もう一つの冷戦

サフ・ロレンツィーニ著
三須拓也・山本健訳 名古屋大学出版会



「経済学者や政治哲学者の思想は、それが正しい場合にも間違っている場合にも、一般に考えられるよりもはるかに強力である」とかつてケインズは説いた。本書が描き出す一つは、「開発」をめぐるそのような諸思想の相剋である。開発を論じる際、概し

て西側諸国のそののみが、しかもある種一枚岩なものとして扱われてきたことを著者は批判し、代わりに、相異なる思想の潮流を示してみせる。その叙述が膨大な史資料に裏付けられていることは、一〇〇頁近い参考文献と注が如実に物語っている。

他方、「遅かれ早かれ、良かれ悪しかれ危険なものは、既得権益ではなく思想である」と見たケインズとは異なり——本書は開発をめぐる利害対立にも十二分の紙幅を割いて叙述する。歴史上、政治経済的な国家建設事業を「開発」と呼ぶようになったのは冷戦期であり、そこには疑いなくその時代状況が反映されている。著者は「冷戦こそが開発というイデオロギーを形成し、開発を求める世界的な願望を生み出し、また今日に至るまで対外援助を支配している制度的構図を形成する上で決定的に重要だった」と述べるが、その限りで本書は確かに政治史である。そこにあるのは思想闘争をも包含するレアルポリティックであり、そして、レアルポリティックにとり、「開発」は手段に他ならなかった。訳者が指摘する通り、アジアや中南米への言及が少ないのは否めないが、それを補って余りある国際開発史である。労作の邦訳が来たこの機会を逃す理由はない。(侯爵)

(二八四頁 税込三七四〇円 6月刊)

差別は思いやりでは解決しない
ジェンダーやLGBTQから考える

神谷悠一著 集英社新書

ジェンダーやセクシュアリティの問題は、近年注目を集めるテーマである。しかし大学の授業レポートも企業の研修も「思いやりが大事」というあたりさわりのない言葉で締め括られてしまうケースが多いと著者はいう。

女性差別も性的少数者差別も、個人の意識を超えた問題として対応する必要がある。例えば「お茶汲みは女性の仕事」という役割分担が、昔から続く会社の慣習によって決められているケースがある。あるいは、パートナ―が同性であることで適切な生活保護を受けられない場合もある。こうした社会のシステムによる問題は「思いやり」で解決されるものではなく、一刻も早く施策を設けることが必要だと著者は主張する。特にLGBTQの問題は、対応の仕方が個人に委ねられていることも多く、あらゆる企業でマニュアルの策定が求められている。

社会人となればもちろん、様々なコミュニティに関わる学生にとっても避けて通れない問題だ。「思いやり」の先を考えることが、未来を変え、自分を守る一歩となる。(荏漢)

(二二四頁 税込八二〇円 8月刊)

今を生きる思想 ハンナ・アレント
全体主義という悪夢

牧野雅彦著 講談社現代新書

「約100ページで教養をイッキ読み!」——このお好感あふれるキャッチフレーズのもと、講談社は新シリーズ「現代新書100」の刊行を開始した。「それはどんな思想なのか」、「なぜその思想が生まれたのか」、「なぜその思想が今こそ読まれるべきなのか」という三つの観点から、思想家のエッセンスを浮かび上がらせること、それが本シリーズの目的である。そして本書は、その記念すべき第二弾である。

本書は、アレントを「全体主義」の思想家として捉えたうえで、『全体主義の起源』を中心にその思想を概観する。著者によれば、アレントが今日においても人びとを惹きつけてやまないのは、アレントが「全体主義」という現象に正面から向き合い、そこから自らの思想を生みだしていったからにはかならない。アレントを読むことは、全体主義に抵抗するための人間のあり方を考えるということなのである。著者が本書を通じて明らかにするのは、全体主義の問題とは何かであり、また全体主義にいかにか抵抗すべきかである。アレントを手軽に知れる一冊。(はや)

(一二〇頁 税込八八〇円 9月刊)

ルネサンス
情報革命の時代

桑木野幸司著 ちくま新書

ルネサンスとは? それは情報爆発の時代だ! 様々な切り口で論じられてきたルネサンスを、本書は〈情報〉という角度から捉え直す。

新大陸発見や印刷術の発達によって、ヨーロッパ大陸では膨大な量の情報が流入・流布する。識者たちは情報氾濫を防ぐため、「百学連環」という知的体系を生み出した。人間は全ての知を掌握できるという思想を前提に、あらゆる情報を学問的に分類、互いの関連を見出すことで、漏れなく情報を己が物にしようとした。このような情報区分の試みが、書誌やインデックスの誕生に繋がるのである。

文字情報の分類も興味深い。古典ラテン語が理想とされたこの時代、人々はあらゆる表現にカノンを求めた。それにより、非常に微細だが、素っ頓狂なトピックに分けられたラテン語表現集が刊行されるに至ったのだ。

この他にも、「イメーシ」を用いた記憶術や、世界を空間的に表現しようとする「地図の間」など、多彩な情報編纂の歴史に驚愕すること間違いなし。

(三三三頁 税込一一〇〇円 5月刊)

京都を読む視点——最近の小説二編から

なだらかな山に囲まれ、大小の川が流れる山紫水明の地、京都。古より多くの文人が、この場所に材を取り魅惑の文芸を編み上げてきた。それらによる都の情景の更新は今もなお続いており、読者はつねに新鮮な京都像に出会えることだろう。今回ご紹介する二つの物語も、京都に対する別の視点を提供してくれるはずである。

八木から出町へ、大堰川から鴨川へ

刊行されてまだ二年。グレゴリー・ケズナジャットの『鴨川ランナー』（講談社）は、いわば越境する京都文学である。表題作は第二回京都文学賞の二部門で最優秀に選ばれた中編。高校の授業で日本語を知り、短期旅行で訪れた京都に魅せられた英語を母語とする「きみ」は、ALTとしてその地に舞い戻る。しかしその赴任先は、南丹市八木町という謎の田舎だったのである。京都市だけが京都ではなかったのか。まあいい。気を取り直し、「きみ」はさきもなく中学校で働き始め、同業者とも交流し、新生活のスタートを切る。



「きみ」が市内に移り住むのはその二年後だった。海外から日本へ、八木から京都へと、主人公は複数の境を超えていく（京都人にとって洛外は勿論、市外など京都ではあり得ない）。しかしその度に彼は、恒常的なヨソ者扱いを受けることとなる。「ネイティブの先生」、「ガイジン」、「海外の匂い」……作中で一貫している二人称の語りには、レットテルを貼られ確固たる自己を確立できずに生きる者の実感が、反映されているのかもしれない。

そんな彼を「きみ」と呼ぶのは誰だろうか？ 例えばそれは自然、

京都の自然かもしれない。八木町を流れる大堰川は、保津川、桂川と名を変え市内に通じている。そのルートは平安時代より木材供給に用いられてきた。さらに桂川は鴨川と合流し、市内の大水脈を形成している。そんな川のそばで「きみ」はランナーであり続けた。のちにこの主人公は日本の文化についてある気づきを得るのだが、その予感既に川が教えてくれていたのではないだろうか。

理解不可能な箇所は相変わらずあった。しかし全体にあるリズムみたいなものが、微かだが自分の中に浸透してくる感覚はあった。どうするかは「自分で決める」

外界にゆっくり馴染むだけが、京都暮らしの秘訣というわけではない。望月麻衣『京都船岡山アストロロジ』（講談社文庫）からは、人生を御する心構えが学べる。家庭や仕事に悩み、船岡山の喫茶店にいるという占い師を訪ねる雑誌編集者の面々。占者の言葉はたしかに彼女らの悩みをクリアにする。しかし、その先は当人に委ねられる。それが「船岡山珈琲店」の流儀らしい。『心』や『想い』が先にある「形」になります。この言葉は、桓武天皇の平安遷都が、船岡山での決心に端を発するという逸話に沿ったものである。「京都寺町三条のホームズ」シリーズで有名な著者は、占星術というモチーフを導入し、悲劇的な因習や闇の深い柵に満ちた京都的世界観に、根本的な見直しを迫っている。

あらゆる角度から読むことで、京都は活気づく。作品によって生じるイメージの揺らぎ、ちょっと味わってみたいひん？ （とよ）

流れる食、流れる人

食欲の秋だ。京大の周りには食事処があれこれと揃っている。その中に何ヶ所か中国から来た人たちによる現地風の味付けの中華料理を出す店がある。あるいはネパール人のやっているカレー屋も。彼らは一体どうして日本に来たのだろう。普段、なんとなく食べている、こうした日本に住む外国人の作る料理と彼らのバックグラウンドについて取り上げてみたい。

一冊目は『中国料理の世界史』（慶應義塾大学出版会）を紹介しよう。世界の「○○料理」といえば中華・

フランス・イタリアなど思い浮かぶだろう。

その中でもどこにでもあると言っているのが中華料理。しかも中国の中でも四川や広



東、上海や福建など各地域で特色の異なる料理が発達している。こ

うした料理がいかにして中国国内で確立し、さらに世界へと広まっ

ていったかがこの一冊で詳しく解き明かされている。いわゆる宮廷料理とされる「満漢全席」が実は二〇世紀に入ってから民間で発達

したものの、各地の料理は一九世紀末ごろからレストランの普及によ

って中国国内で確立していったもの、などと知ると驚きも大きい。

その一方で、東南アジアを中心に華人が進出した地域では中国料理と現地の料理とがミックスして、ベトナムやタイ料理、フィリピン料理などへと展開していった。さらには欧米では差別に苦しみながらチャイナタウンの定着とともに広まっていた。中国国内での各地の人の移動から世界的な移民の流れ、そしてそれに伴う中国料理の広まりが読み取れる一冊である。

さて、日本でも中国料理は、ラーメンに「町中華」とおなじみの

存在だ。だが最近では日本にある海外の味はより多様になっている。カレー屋やケバブ店、サムギョプサル屋。在日外国人の人々が彼らの味を日本で作り料理として出しているのだ。その中には祖国を追われて日本に暮らすことになった人たちがいる。『故郷の味は海をこえて』（ポプラ社）は難民として日本に来て料理店を営む



人々の味と暮らしを紹介した一冊だ。戦争や弾圧などの危機を逃れて知らない土地で生きる中で、彼らの拠り所となったのが自分の慣れ親しんだ味なのかもしれない。日本の難民認定は厳しい。自分だけは逃れられたものの祖国に置いてきた親族の行方がわからない人もいる。離ればなれでも彼らの作った味が日本で、彼らの同国人、あるいは他の人びととのつながりを作っていく。そこに少し希望が見えるような気がする。

チャイナタウンではないが、知らぬ国で生きていくには同郷のつながりを作るのが有効だ。一人では心もなくなても仲間がいれば生きやすくなる。そうして日本のあちこちに在日外国人の街が出来ているのだ。最近有名なのは東京新大久保のコリアンタウンだったりするが、さまざまな外国人街のレポートを集めたのが、『日本の異国…在日外国人の知られざる日常』（晶文社）だ。収録された街の多くは首都圏周辺だが、都市の中に彼ら在日の人々が根を下ろしている現状が窺える。

流れる食が集まる所は人が集まる所だ。各地の食の集まる日本が、流れてきた人にも住みやすい所であればいいのだが。

（ねい）

編集後記

巡り合わせがあり、今月から『綴葉』の編集委員となった。書評と言えば文芸批評というイメージを持っていたため、文学に苦手意識のある私ができるだろうかと思ったが、『綴葉』は学術書・教養書も積極的に取り扱っていると聞き、お受けすることにした。

さて、自分がなぜ文学が得意でないか改めて考えてみると、登場人物の複雑な感情をきちんと受け止められず、楽しみ切れていない気がするのではないかと思う。また、それは自分が精神的に未成熟なせいではないかというコンプレックスもある。大学生なら共感すると言われる朝井リョウ『何者』を読んで、「この中だと、私はギンジだなあ」と内心イキってしまうタイプの人間なのである。

そんな私だが、一つだけ好きな小説のジャンルがある。それは所謂ディストピアものである。伊藤計劃が好きで、この春ようやく『一九八四』『すばらしき新世界』『華氏 451度』『侍女の物語』の四大古典を制覇した。ディストピアはうすら寒い世界として描かれるが、私はむしろディストピア小説の悪役が語る倒錯した論理に惹かれてしまう。清濁併せ呑む人間の複雑性は、合理化された世界の中で逆説的に浮かび上がるくらいが私にはちょうどいいのかもしれない。(りっち〜)

当てよう！ 図書カード

さまざまな論争を巻き起こした安倍元首相の国葬。9月に行われましたが、その費用は、最終的に12億円台になったそうです。それではここで問題。昭和42年には吉田茂元首相の国葬が行われましたが、この国葬は合計でいくらかかったのでしょうか？

1. 約1800万円
2. 約8900万円
3. 約7億2000万円
4. 約21億1000万円

(ぱや)

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先(<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>)から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは12月15日です。



《7月号の解答》 7月号の問題の正解は、4.の「正五位少将」でした。官位っていうと、昔よくプレイしていた『信長の野望』を思い出します。ゲームだと「買う」ものだったんですよ、そういえば……図書カードの当選者は、宗佑磨さん、しおんさん、よっさんさん、かすみんさん、よっしーさんの5名です。当選おめでとうございます。

(侯爵)

読者からひびく

○あまり読書をする方ではないのですが、またまた手に取った書評を通して読んでみたくなりました。(医学部・しおん)

——手に取っていたきましたこと、ありがとうございます。みなさんが本と出会う偶然を提供できているとしたら、それはまさに僥倖に他なりません。ぜひ今後とも最前線に。○教科書以外あまり本を読めていないので、試験が終わったら本を読みたいです。教科書とは180度反対の、めちゃくちゃ気楽に読める本などが知りたいです！(法科大学院・真二つ)

——盛夏は遠くなりにはけり……今更お答えすることになってしまいました……後期が始まって一ヶ月経ち、少し落ち着いて頃かしれず、でなければ、冬休みの読書の参考にしてください。早速脱線しちゃうんですけど、綴葉で取り上げる本って割とカタいですが、そういう書評はっかしといてアレですが……閑話休題。気楽に、というよりは短編でしようか。ここでは一冊、司馬遼太郎『新撰組血風録』を挙げておきます。あるいは詩集もいいかもしれません。そういえば先月号で詩集を薦めていた奴がいたような。(侯爵)